

学位論文内容の要旨

学位申請者	船戸 はるな 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	要 旨
論文題目	継続的な文字チャットによる日本語学習者の情報の伝達に関わる言語表現の変更	<p>本研究では、日本語を外国語として学ぶ（JFL）学習者の日本語指導への示唆を得ることを目的に、情報の伝達に関わる言語表現が多く使用される文字チャットを対象に、JFL 環境で日本語を学ぶ学習者の、情報を伝達する側の言語行動、情報を受け取る側の言語行動の双方の観点から分析を行った。情報を伝達する側の言語行動の分析においては、終助詞「ね」及び直接形／間接形に着目し、情報を受け取る側の言語行動の分析においては、相づちに着目した。</p> <p>その結果、終助詞「ね」に関しては、学習者は母語話者に比べ「ね」の使用頻度がかかなり低いこと、そして、任意の「ね」が多く必須の「ね」の非用が多い、ということが明らかになった。母語話者との継続的なチャット後は、「ね」の使用頻度、特に必須の「ね」の増加、必須の「ね」の非用の減少という母語話者の使用に近くなる変化が見られた。さらに、学習者は情報が話し手のなわ張りのみに属する場合（領域 A）に「ね」と「よ」の使い分けが困難であることが明らかになった。また、母語話者とのチャット継続後も、領域 A における「ね」と「よ」の使い分けには改善は見られなかった。</p> <p>直接形／間接形に関しては、学習者は間接形の誤用が少ない一方、直接形の誤用は多いことが明らかになった。母語話者とのチャット継続後は、学習者の直接形の誤用は大幅に減少し、また、直接形と間接形のいずれも使用できる場合に間接形を使用する頻度が高くなったことが確認された。</p> <p>相づちに関しては、学習者は母語話者に比べ相づちの頻度が少ないこと、そして、相づちを単独で使用する事が多く、「意見・感想」を表わす相づちが少ない、ということが明らかになった。母語話者とのチャット継続後は、相づちの使用頻度は増加した。また、相づちの単独使用の減少、「意見・感想」を表す相づちの増加が見られた。</p> <p>音声会話でも同様の分析を行ったところ、文字チャットより変化の幅が小さいことや、「ね」の誤用の増加など、文字チャットと異なる点も見られたが、総じて文字チャットと同傾向といえる変化が見られた。</p> <p>以上のように、母語話者との文字チャットを継続することによって、終助詞「ね」、直接／間接形、相づちのいずれも、その使用が母語話者の特徴に近づく変化をしたことが明らかになり、JFL 環境で学ぶ日本語学習者にとっての学習ツールとしての文字チャットの有効性が検証された。</p>
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 森山 新	
	教授 高崎 みどり	
	教授 加賀美 常美代	
	准教授 伊藤 さとみ	